法学部

「やる気応援奨学金」リポート

Vol. 115

カンボジアで新興国ビジネス 農業機械割賦販売と債権管理

法学部法律学科三年　竹原　弥（私立中央大学附属高校）

はじめに

私は二〇一四年度後期「やる気応援奨学金」の支援をいただき、二〇一五年二月からカンボジア王国バッタンバン州において、カンボジア現地日系企業「JCグループ」の下でビジネスを実務で学ぶためのインターンシップを行っている。

当奨学金の支援対象期間は二〇一五年二月上旬から三月下旬までであるが、私の「JCグループ」でのインターン開始時期は二〇一四年九月上旬までさかのぼる。大学の休業期間を利用し、一－二週間程度の滞在を数回行ってきた。そして二月からの本格的なインターンシップ活動に備えてきた。

これまで、私は本誌に掲載された先輩たちの「やる気応援奨学金」活動リポートを参考に、自身の計画を練ってきた。今回は私自身が活動リポートを執筆させていただくということで大変光栄に思っている。

私の活動期間は休学期間を含め、九月まで続き、前述の支援対象期間を超えてインターンシップ活動を行う。

今回のリポートでは休学期間中も含めたこれまでの活動を報告させていただきたいと思っている。このリポートが後輩の方々の課外活動への関心を少しでも高めることが出来れば幸いである。

活動までの経緯

自分自身は将来「大きな事」をやりたい。そのために「人と違う何か」が出来ないか探していた。私の長期インターンまでの経緯は、まさしく「運と行動」である。古くからの付き合いである友人の方から「サムライカレープロジェクト」という団体を紹介していただいた。そして八月生としてその団体に参加した。その中で「サムライカレープロジェクト」の企画者の方を通じてカンボジアのさまざまな経営者の方々に紹介していただいた。そして、現在のJCグループに巡り合い、インターンをさせていただいている。

JCグループは二〇〇八年にカンボジアで創業された日系ベンチャー企業で、農業を中心に物流、金融、ITなどを複合的に幅広く展開している。日本（Japan）のJとカンボジア（Cambodia）のCを取ってJCというブランドを冠した会社が各事業ごとにあるグループ企業群の総称だ。

JCグループという企業に巡り合えた「運」と、それを探すためにカンボジアにまで来たという「行動」が合わさり実ったインターンシップ活動である。

毎日の朝礼で情報共有を行う

また、前記の文で私は幾度か「紹介」という単語を用いた。私の活動までの経緯の特徴として、インターンシップあっせん団体を用いてインターンを行ったわけではないという点がある。すべて自分の意思に基づき自分で受け入れ先を探した。リスクも自分で背負った。このようにしてこのチャンスをつかんだ。だからこそ、他力本願にならずその経験の価値を理解し、そして本気でその機会を無駄にしないがためにベストを尽くすことが出来ていると感じている。

生活の厳しさと経済成長

私はカンボジア王国バッタンバン州に滞在している。執筆現在で滞在六カ月目である。バッタンバン州は、首都プノンペン特別市から三〇〇キロ程度離れたタイ国境に近い場所である。アンコールワットのあるシェムリアップ州からはバスで三時間ほどの場所にある。

厳しい道のりを経て顧客宅へ向かう

カンボジアの地方での生活は日本人にとって厳しい面が多い。水道水は不衛生なので、うがいをする時は飲料水を使う。また、整備が進んでいない荒い道路をバイクで進み通勤した。業務関連で村に向かった時は、目的地周辺のスタッフの実家で一泊する機会があった。実際の農家たちは日本ではもうなくなった高床式建物に、蚊帳をつり生活している。また、シャワーももちろんなく川に入って体を洗い、トイレも自分で水を流して汚水を流す。風呂やシャワーがないので周辺の川で体を洗うことも体験した。このようにカンボジアの村を肌で感じることが出来た。

一方で経済の発展具合も目の当たりにする。プノンペンではもちろん、地方のバッタンバンでもレクサスなどの高級車をよく見掛ける。また、日々道路などのインフラが工事され、整備されていることも実感する。私のインターンを行っている事業は、トラクターなどの農業機械の割賦販売にかかわる部門であり、そこでも多くの農家が農業機械を分割払いで購入している。これは、農家も次第に裕福になり、農業機械への需要が増えてきたことを表している。また、一般的に多く言われている地雷に関しても、これまで注意を受けたことはなく、生活をしていて地雷を気にする機会はない。そして、同世代のカンボジア人たちは日本人よりも英語とエクセルを使いこなしている。最初のうちは私がエクセルに関して教えてもらうようなことも多々あった。このようにカンボジアは後進国としての不便さは残しつつも、世間一般に言われているような「貧困」や「地雷」だけの国ではないということが実感出来る。

インターンで新興国ビジネス体感

私がインターンシップ生として配属されている部門は、割賦販売の際に発生した債権管理部門である。これまで、スタッフたちと共にカンボジア奥地の農家の元へ信用調査に行った。また、割賦支払いが滞っている農家の元へ向かい、交渉などを行っている。更に、業務を行ううえで日本では慣例となっていることを取り入れてもらいながら、業務改善を促している。そのほか、管理しているクメール語表記の契約関連書類を現地スタッフと協力しながらデータにまとめ、最近進めている債権管理のシステム化に伴う入力情報の整理と実際の入力を行っている。

これまでの活動を振り返って

本格的なインターン活動の最初の二カ月ほどは、慣れない生活と不十分なコミュニケーションで苦労をした。不衛生な環境で頻繁に体調を崩したり、意思疎通不足から情報を共有しきれていなかった。バッタンバンでの活動に慣れるまで、状況把握と生活への適応に手いっぱいで厳しい時期を過ごした。

現在はそれらを乗り越え、より良い業務が行われるように改善提案を積極的に行っている。例えば、スタッフたちがオフィスの外に出る際は、事前に管理部が把握するための仕組みを作った。また、農家宅へ出張を行ったスタッフたちの情報や成果を、ほかのメンバー

たちが共有しやすくするために報告書を導入させた。

これら業務改善を促す中で、自身のマネジメント力が強化されたと思う。幾つかの局面で私はカンボジア人スタッフに対し業務改善のための指示を出した。カンボジア人スタッフは、目新しい新たなやり方を提案された場合、その提案をしっかり聞き、実行まで行ってくれる。しかし、既にあるやり方の改善を促すことは、新たな提案をすることと異なり、なかなか素直に聞いてもらえず難しい。初めのうちは、指摘をする私もけげんな顔をするカンボジア人スタッフたちに萎縮してしまった。しかし、途中からは指摘をする際に、フレンドリーに指摘することを心掛けていくこと、理解の早いカンボジア人スタッフを見付け、そのスタッフを通して指示を行うことで、それほど苦にならず改善が可能であることが分かった。また、けげんそうな顔をされても、「仕事だから仕方ない」と割り切れるようになってきた。そして徐々にカンボジア人スタッフたち自身も理解を持ってくれるようになった。私は日本人であるから、最初のうちは日本式の指示を行っていたが、国や文化が異なれば同じように行ってうまくいくわけではないということを実感した。これはカンボジアという「一例」である。しかし、その「一例」が私の中にあるだけで、これからの将来似たような境遇が起こっても、その経験を踏まえ物事を考えられるようになると思う。指示出しという、マネジメント力の一つであるスキルを、滞在期間中に養えているのではないかと考えている。

また、カンボジアでの活動を通して私が身をもって実感したことがある。現在の日本の学生はこれから経済成長中のＡＳＥＡＮそのほかの学生たちと、競争をしていかなければならないということだ。例えば、私がインターンをしている職場で、週六日で夜間学校に通い、週五日と土曜半日はオフィスで働いているスタッフがいる。彼女の年齢は私と同じ二〇歳である。業務では毎日顧客農家と電話で返済について交渉し、債権管理を行う。その上でＰＣを巧みに使いこなし、英語も実務レベルで使いこなしている。カンボジアの学生の多くは、彼女のように昼間に働いてお金を稼いで大学に通い、自分と家族のために将来活躍しようと頑張っている。そして昼間に行う業務は、日本で行うインターンよりもっと重要な仕事を任せられている。ビジネスマンや社会人からも実務レベルで有意義な経験を既にしていると認められるような任務だ。語学的問題を除けば、日本でも通用するような人材がカンボジア基準の待遇で雇われている。

カンボジア国内の発展とグローバル化に伴い、日本に来て働く新興国の若い人材も増えてくる。そのような中で日本人学生は彼女のような優秀な外国人人材と競争していかなければならなくなる。

債権管理部の同僚たちと

カンボジアで働く現地スタッフは、ほぼ皆が完璧でなくとも英語を使うことが出来る。なぜなら、カンボジア国内に回るインターネット情報やカンボジア人同士のビジネスメールが英語で行われているからである。英語を使えるということは海外に出て働くうえで最低条件である。しかし、一方でその能力は完璧である必要はなく、支障なく英語を使うことが出来れば良いのである。海外に出て多国籍の中で競争していくために重要なことは、自分自身に得意分野を身につけることである。そして、得意分野を全世界で引き出すために英語が必要なのである。

私自身、最初にバッタンバンに来た時、まだ学生である自分に何が出来るか分からず苦しい時期を過ごした。もし私が何かに精通した能力や、バッタンバンで何かを生かせる経験があればより大きなアドバンテージを持つことが出来るのではないかと感じている。

帰国した後に、この経験と気付きを踏まえ、自分の分野を探し伸ばしていきたいと考えている。